



JANES Newsletter No.25-2

日本ナイル・エチオピア学会

2017年11月30日

目次

1 フィールド通信 9頁

2 ナイル・エチオピア地域
現地・渡航情報 11頁

3 第26回学術大会最優秀発表賞受賞者によるエッセイ
12頁

1. フィールド通信

仕事のあいまに

松原 加奈、京都大学

エチオピアの主要な産業はコーヒーや切り花などの農業であり、2015/2016年の農林漁業部門のGDP寄与率は37.2%である(African Economic Outlook 2017)。しかし、2007年から2016年におけるエチオピアの製造業の付加価値の年間成長率は、平均12.8%とサブサハラアフリカの平均3.9%に比べてはるかに高い(World Bank 2017)。エチオピアはアフリカ諸国のなかで、製造業の成長が顕著な国である。

そんなエチオピアの首都アジスアベバにおいて、わたしは2016年より製造業のひとつである皮革産業のくつやかばん、財布などを製作する企業の調査をおこなっている。調査している企業の勤務時間は、平日が朝8時から夕方17時までのフルタイム、土曜日が



写真1 アジスアベバの工場で作られたくつ

写真2 昼休みに外に出てコーヒーを楽しむ従業員



朝8時から昼13時までである。企業によっては土曜日の勤務時間もフルタイムとし仕事の進捗が遅いと、日曜日でも1日中仕事をおこなう。また、生産が追いつかず、平日夜まで残業をする企業もある。就業中は、従業員が黙々と作業をおこなう雰囲気のある企業もあれば、作業の待ち時間におしゃべりがみられる企業もある。

2016年から2017年にかけて実施した、約6ヶ月の現地調査で皮革製品を製造する企業6社を訪問した。新しく企業で調査を始めるときはたいてい、企業で働く人びととよく話せるであろうか、とやきもきする。そのうえ、仕事に長時間、従業員に話を聞くのはためらわれる。しかし、その心配を取り除いてくれるのが、小休憩の際や昼食をとったあとに必ず飲む、コーヒーや紅茶であった。コーヒーや紅茶を飲んでいる時間は、会話が自然と生まれ、人びとの顔がほころぶひとときなのである。

調査をおこなった企業のうち、2社が午前10時ごろに10分から15分ほどコーヒーか紅茶を飲み、パンを食べる時間が与えられる。いうならば朝食の時間である。別の企業には小休憩はないが、それでも外から売り子が企業にきたり、企業の食堂で働くひとが工場内にきたりして、コーヒー、紅茶、パンを販売することもある。そして従業員が各々、勤務時間に工場の入り口や工場内で朝食をとる。お昼休みになり食事を終えたあと、ほとんどの企業の従業員が、外で、もしくは企業の食堂や工場の一角でコーヒーを飲んでいた。人びとはときに静かに、ときに明るく会話を楽しみながらコーヒーを飲む。彼

ら、彼女らはコーヒーを飲みながらわたしに話しかけてくれる。

「エチオピアはどう？」

「カナは工場にずっといるけど、何をしているの？」

話しているうちに、お互いがどんな人物であるかを理解する。わたしに対する認識が突然工場にきたアジア人から、ひとりの人間に変わる瞬間である。

エチオピアに渡航して初めて調査をおこなった企業で、オーナーと昼食を食べる間柄になった。ある日、コーヒーを飲みながら、彼女は従業員の話語り始めた。

「以前、彼は土日だけ来るパートだった。1か月前から平日働いていた会社を辞めて、この企業で仕事を始めたのよ。今日は、やらなければいけない工程を何度言っても彼がとぼしてしまっから、叱ったの。」

「彼女は村出身で親が結婚を強いて、それがいやで村から出てきたの。雇って、彼女のために家を借りてあげた。」

「あのひとは…このひとは…」

お昼からコーヒーの時間を含めて、その日彼女は2時間も色々な話をしてくれた。従業員15名程度の工場、自身もものづくりをおこない、仕事では私語禁止！をモットーにしている彼女に話を聞くことができるのは、とてもありがたいことである。

別の日、そのオーナーの姉が、食事を終えてコーヒーを飲んでいるときに愚痴をこぼした。「仕事は好きだけど、ときどきとても退屈になる」そう言ったあと、すこしほほ笑み、彼女は仕事に戻っていった。

仕事中には話せないことをつぶやき、話し始める。仕事のあいまのこの至福の時間が、彼ら、彼女らの仕事のやる気を、奮い立たせているのかもしれない。

参考文献

African Economic Outlook HP:
<http://www.africaneconomicoutlook.org/en>
(2017年10月20日)

World Bank HP: <https://data.worldbank.org/>
(2017年10月20日)

2. ナイル・エチオピア地域 現地・渡航情報



- I. 国際エチオピア学会情報
- II. エチオピア現地情報
- III. 再掲載:エチオピアビザ情報(学会よりお願い)

I. 国際エチオピア学会情報

2018年10月1日～5日にかけてメケレ大学にて第20回国際エチオピア学会が開催されます。全部で87パネルが登録されており、それらが12の分野・テーマにわかれて開催されます(下記)。個人発表の要旨受付は2017年11月30日に締め切られました。学会の参加登録手続きは、12月1日からウェブ上で開始予定です。

- 01 Archaeology, Paleoanthropology & Heritage (5パネル)
- 02 Arts & Architecture (14パネル)
- 03 Economics & Development Studies (7パネル)
- 04 Education & Pedagogical Science (3パネル)
- 05 History of the States and Peoples of the Region (Political and Cultural) (14パネル)
- 06 Human Geography, Environment & Ecology 0601 "Cartography and Itineraries": Territorial Knowledge and Spat (5パネル)
- 07 Law, Governance & Political Economy (6パネル)
- 08 Philology, Literature & Linguistics (6パネル)
- 09 Political Science (3パネル)
- 10 Migration Studies (3パネル)
- 11 Population & Gender Studies (3パネル)
- 12 Social Anthropology & Cultural Studies (13パネル)
- 13 Studies of Religion (5パネル)

各パネルの要旨
<http://www.ices20-mu.org/Panels.pdf?20171030>

学会参加登録サイト
<http://www.ices20-mu.org/registration.html>

(金子守恵会員)

II. エチオピア現地情報

外務省海外安全ホームページによれば、2017年11月26日時点(2017年10月5日公開情報)で、バハルダールおよびオロミア州は危険度レベル2です(不急不急の渡航は止めてください。渡航する場合には特別な注意を払うとともに、十分な安全対策をとってください)。在エチオピア日本大使館が在留邦人や旅行者へ発信している危険情報によれば、(ニューズレターNo.25-1が配信されたあと)8月6日バハルダール市内ケベレ周辺にて爆弾事件、10月11日頃からオロミア州アンボ(Ambo)、シャシャマネ(Shashamane)、ドドラ(Dodola)、東ハラルゲ(East Harerge)地区など州内各地でデモや暴動、10月25日にはオロミア州アンボ市(Ambo)において激しいデモ(治安当局が鎮圧にあたる)、11月17日にはバハルダール市内のホテルにおいて爆弾事件が発生したとの情報がありました。渡航の場合は、事前に十分に情報を収集し、安全対策を講じることを強く勧めます。

外務省安全情報サイト
http://www.anzen.mofa.go.jp/info/pchazardspecificinfo_2017T079.html#ad-image-0

(金子守恵会員)

III. 再掲載:エチオピアビザ情報 (学会よりお願い)

2016年度より、重田学会長には年間40人以上ものビジネスビザの取得支援(査証許可書申請)取得手続きをおこなっていただきました。2017年度にはいり、アジスアベバ大学をはじめ、エチオピアのカウンターパート側もこの手続きに慣れてきた様子ですので、今後は各人のカウンターパート機関を通じて、個別にビザの手続きをすすめていただきたく願います。(次号(No.25-3)にて取得手続きの流れについて掲載予定です)

(金子守恵会員)



3. 第26回学術大会最優秀発表賞受賞者によるフィールドエッセイ

発表演題 「ティグライ地方の伝統的な集落形成とメケレの都市形成」

清水信宏(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科・日本学術振興会特別研究員(DC))

いつのことだったろう、調査を終えて車でメケレへ帰る道中「ほら見てみな、段々畑はティグライの伝統なんだよ」と、隣に乗っていたエチオピア人が話してくれたのは。その時「ほー、なるほど」などと返し、呑気にサボテンをむしゃむしゃ食べていたであろう私は、ティグライ地方の集落や都市の成り立ちを考える上での地形や斜面の重要性をまだ知らない。

先輩である岡崎瑠美さんの論文を読み、私の研究の対象都市であるメケレがメケレになる前(つまり19世紀後半以前)、その地には5つの斜面集落と4つの平地集落が存在していたことを知った。私の研究で対象としているインダ・メスケルもその中の1つにあたるものなのだが、心惹かれたのは、航空写真で見るとその集落の区画1つ1つがぐねぐねしておもしろそうだということであった(写真1)。ちなみに、平地にあるメケレの一番古い地区の道もまた、まっすぐではなく曲がりくねっていた。「どう道をつくるのか」により意識的な近代都市計画のロジックとは異なるなにかをそこに見出す必要があるわけだが、一体それは対象地域においてはなんなのだろう。

「エチオピアにおける都市とは一体どのようなものか」という謎を解くためのヒントは、Richard Pankhurstの著した「History of Ethiopian Towns」という2巻からなる本にも記されている。エチオピアを訪れた歴代の外国人の記述を主な切り口とし各地の歴史を取りまとめたこの著作は、各時代それぞれの場所がいかなる地だったのかということについて、さまざまな想像を掻き立ててくれ、非常に興味深い。ただ、全体を読んで

も「Ethiopian Town」とは一体どういったものなのかと問いの答えを本作から見いだすことは難しく、むしろ彼は時折「city」や「town」という言葉を利用するのを避けているようにすら見受けられる。逆説的に、17世紀にゴンダールができるまで恒久的な首都を持たなかったエチオピアにおいて「都市」を見いだすのは確かに難しい問題だ、ということはいくぶん分かった。

ということで、実際に気になったインダ・メスケルを例にとり、その集落がどう形作られていったのかを復元的に明らかにすることによって、ティグライ地方全体の集落形成や都市形成について考えていこうとなったわけだが、話を聞いていると興味深い話が出てくるのがフィールドワークの面白い所である。分かったのは、現在存在する53の区画は元を辿れば8の家系に行き着くということ、8の家系のうち7の家系では少なくともその祖先が何らかの肩書きを保持していたということであった。中でもその斜面集落の一番上に住んでいる家系は集落の中で一番古い歴史を持ち、その末裔は、メケレを首都とした19世紀後半の皇帝ヨハネス4世やその父ミルチャとの関係を物語るファミリー・ヒストリーを語ってくれた。

また、1つ1つの区画がぐねぐねしているという謎について現地を観察してみると、斜面と斜面の間にある平坦な所に区画が構えられている様子を確認することができた(写真2)。斜面の形状がぐねぐねしているから区画の形状もぐねぐねする、と言ってしまつと何のことはない話になるのだが、そうするとなぜわざわざ斜面に区画を構えるのかということになってくる。

ふと段々畑のくだりを思い出したので先行研究を確認してみると、なるほど農業に適した肥沃な土は谷底の水の近くに多

く見られるという伝統的な農業に関する知識が存在するらしい。つまり、肥沃な土の存在する谷底から段々畑を展開させていくため、地形に寄り添った集落、もとい「段々集落」とでも呼びうるようなものが斜面の上の方に形成されていったのではないか。集落の防備という観点からしても斜面の上の方というのは合理的な立地である。ちなみにティグライ地方においては、斜面集落の一番上に教会の立地する事例をしばしば見受けられることがある。

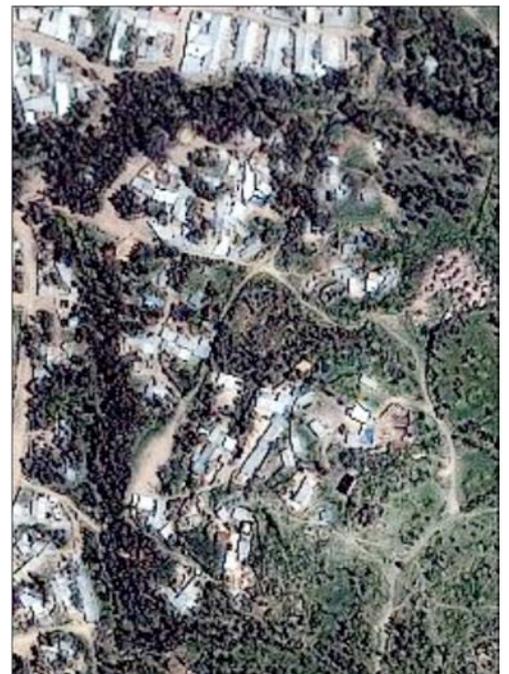


写真1 対象集落インダ・メスケルの航空写真

おもしろいのは、20世紀初頭、平地に位置するメケレ旧市街のパレス周辺においても、大半の家が「several minor hills」の上に建てられていた記述が1901年にメケレを訪れたWyldeが記述していることである。つまり、もともとの「段々集落」の考え方が平地においても適用され、微地形を探し出しながら初期の都市発展が進んでいったのではないかと。こうした都市のユニークな空間的特性は、今後の都市の適切かつ魅力的な発展に向けどう活かしていくのかということと関連づけて議論していくべきであるし、またその議論の中から新たな問いを生み出していくようなループを作り出していくことが重要なのではないかと。

さて、いい機会だから今回のナイル・エチオピア学会はこれについて発表しようということで発表させていただいたのだが、発表を終えた後1つ示唆に富むご指摘をいただいた。「エチオピアにおいて、都市を意味する言葉は一体何で、それはどのような意味を本来的に含んでいるものなのか」と。1つの都市や集落の事例に夢中になっていた結果、「Ethiopian Town」とは一体どういったものなのかというそもそもの問いには、実は結局のところ全く答えられていないという事実に気づく。「木を見て森を見ず」とはまさにこのこと。これについてはまた別の機会にぜひ発表させていただければと思う。最後に、調査に協力してくれたアシスタントや地元の人々に記して感謝し、このエッセイを締めくくりたい。

参考文献

Corbeels, M., Abebe S. and Mitiku H. (2000) Farmers' Knowledge of Soil Fertility and Local Management Strategies in Tigray, Ethiopia. *Managing Africa's Soils*, No.10.

Okazaki, R. (2010) *Study on the Urban Formation and Actuality of the Central District in Mekelle, Ethiopia: Appraisal of Historical Quarters and Inner City Problems*, Master's Thesis: Keio University.

Pankhurst R. (1982) *History of Ethiopian Towns: from the Middle Ages to the Early Nineteenth Century*. Wiesbaden: Steiner.

Pankhurst R. (1985) *History of Ethiopian Towns: from the Mid-nineteenth Century to 1935*. Stuttgart: Steiner.

Wylde, A.B. (1901) *Modern Abyssinia*. London: Methuen & Co.

編集後記

前号のニュースレター(No.25-1)では、巻頭言にて、1960年にエチオピアを訪問された(当時)皇太子と皇太子妃(現天皇陛下と皇后陛下)の貴重なお写真とともにその当時のアフリカ研究についてまとめを掲載させていただきましたが、今号のニュースレターでは、昨年度はじめてエチオピアへ渡航した学生会員によるフィールド便りと今年度の学会で優秀発表賞を受賞した学生会員の方のエッセイを掲載しました。院生のフィールドワーク報告によって描かれる現在のエチオピアの姿をお楽しみいただければ幸いです。

前号(2017年8月1日)を配信して以降、バハルダール、オロミア州の各地で不安定な状況が断続的に続いている様子です。繰り返しになりますが、年末年始に渡航を予定されている方は十分に情報を収集していただくことを強く勧めます。

2017年も残すところあと1ヶ月をきりました。本年もJANESニュースレターをご購読いただきありがとうございます。来年もよろしくお願ひいたします。

(MK)



写真2 インダ・メスケルに存在するある区画の様子

- ・ 9 頁目写真上下: アジスアベバ (撮影: 2017年、松原加奈)
- ・ 10 頁目写真上: アジスアベバ (撮影: 2017年、松原加奈)
- ・ 11 頁目写真上: エチオピア、ジンカ市郊外 (撮影: 2017年、金子守恵)
- ・ 12 頁目写真上: 富山大学 (撮影: 2017年、村橋勲)
- ・ 12 頁目写真右下: エチオピア (撮影: 2015年、清水信宏)
- ・ 13 頁目写真左下: エチオピア (撮影: 2011年、清水信宏)

JANES ニュースレター No.25-2

2017年11月30日配信

編集・配信: 日本ナイル・エチオピア学会

編集委員: 金子守恵、佐藤靖明

佐藤美穂、村橋勲